

あんによん シネマ

在日の映画について
知ろう！

た具合である。また、戦中、国策映画として、望枝の決死隊（一九四三年今井正監督）が公開された。朝鮮と旧満州との国境、抗日パルチザン征伐に命を賭ける日本人巡査一家と配下の朝鮮人が、さながらハリウッドの西部劇のように撮られた。

太平洋戦争で日本が敗北し朝鮮が解放されると、日本映画も朝鮮人の描き方を一変させる。朝鮮を植民地支配してきた諷刺意識が働いたり、左翼的映画人が自由に活動できるようになったためである。植民地支配に対する反省として、基本的には朝鮮人差別を否定する映画がみられるようになる。例えば、『壁あつき部屋』（一九五六年小林正樹監督）では、戦犯とされた朝鮮人の悲劇を描き皇民化政策を断罪し、『どたんば』（一九五七年内田吐夢監督）では、朝鮮人を尊厳をもって描き、『オモヒと少年』（一九五八年森園忠監督）では、朝鮮人を主人公として教育的見地から差別と偏見の打破を試みるという

まであれば、朝鮮人従軍慰安婦を描いた最初の日本映画になる予定であったこの作品は、CIE（民間情報教育局）GHQの下部組織で、制作される映画の検閲をめぐって絶対的な権限を与えられた。日本側の制作者は企画と脚本のすべてをあらかじめ英語に翻訳し、許可を受けなければならなかった。完成した映画はさらにCIR（民間検閲支隊）によって、二度目の検閲を受けた。CIEの中心人物は民間のアメリカ人であったが、CIRは軍属によって構成され、事実上の軍事検閲がなされた。この十数回にわたる検閲によって、ついに原作の跡を止めぬばかりに内容が変更された。

日活の大スターであった吉永小百合が主演した『キューボラのある街』（一九六二年浦山桐郎監督）では共和国への帰国運動が描かれている。主人公の石黒ジュン（吉永小百合）は中学三年生。鋳物工場で働く父・辰五郎（東野英治郎）と母・トミ（杉山徳子）そして弟・タカユキと慎ましく暮らしている。ガキ大将のタカユキはいつもサンキチと遊んでおり、またサンキチの姉・ヨシエはジュンの同級生でもある。サンキチの母・美代（菅井きん）は日本人だが、父（浜村純）は朝鮮人である。サンキチの父は共和国への帰国を考えている。しかし、妻は異郷の地である共和国行きを渋っている。



浦山桐郎『キューボラのある街』
1962年写真提供 / 日活株式会社

ジュンがヨシエと仲が良いことを知った母は、「あの朝鮮人のところかいい？危ないよ、お前」と肩をひそめ、酔った父は、「野郎！朝鮮と付き合ってるのか？このろくでなし！」と怒鳴る。しかしジュンは毅然として、朝鮮の子と付き合っただけが悪いのよ。父ちゃん！と問い返す。帰国が決まったサンキチのためにタカユキは学芸会の主役を譲る。ヒロイン役のカオリちゃんが好きだったサンキチに日本での思い出をつくらせてやるためだ。演目はルナルの『にんじん』である。サンキチが、僕はいんじんです。髪が赤いから奥さんがつけたのです。の台詞を言うと、突然「サンちゃん、朝鮮人参！」の野次が飛び、サンキチは動揺し、次の台詞を忘れてしまふ。やがてサンキチの一家が共和国へ出発する日が来る。川口駅前には帰国者たちの送別に来た人たちで溢れる。「北朝鮮は新国家建設中だから、ビー玉なんかねえだろう。お前威張れるぜ」（注・原詞ママ）と言って、タカユキは銭別として一袋のビー玉をサンキチに渡す。ヨシエはジュンに自分の使っていた自転車を贈る。

大島渚は『日本春歌考』（一九六七年）や『帰って来たヨッパライ』（一九六八年）で、これまで日本映画が禁忌としてきた在日韓国・朝鮮人問題を取り上げ、天皇制の起源が朝鮮半島にあるといったスキャンダラスな

科白を登場人物に語らせた。こうした大島の傾向が頂点に達したのは『絞死刑』（一九六八年）である。死刑囚の青年R（尹隆道韓国青年会中央本部初代会長）に絞死刑が執行されたが、何故かRは死に至らず、しかも執行のショックで自分がRである事がわからない心神喪失状態となってしまう。そのままの状態での刑の執行は法律で禁じられているため、関係者は彼の犯した罪を思い出させようとRの殺人や家庭環境を素人芝居で演じ始める……。やがてRは自分がRであることを認めるが、「あなた方の言うRではないので無罪である」と結論付ける。だがRはその思想ゆえに生かしておくことのできない存在だと宣告される……。主人公のRは、一九五八年夏に起きた小松川高校事件で、六二年に死刑が執行された在日朝鮮人李珍宇がモデルである。日英合作となった『戦場のメリークリスマス』（一九八三年）は太平洋戦争中にジャワに日本軍が建てた捕虜収容所を舞台にしている。英国の作家ローレンス・ヴァン・デル・ポストが、自らの捕虜体験を綴った『影さす格子』が原作である。ここに原作にないエピソードが大島の手によって加えられている。金本と呼ばれる一人の朝鮮人軍属が、懲罰房に入れられていたオランダ人兵と姦通

したことが発覚し、原軍曹（ビートたけし）による処罰を受け、そして切腹させられる。切腹の際、彼は「アイゴ」と叫ぶ。この映画での彼の唯一の台詞である。朝鮮人であるのに、自決していく時まで日本式であるという不条理がここにある。軍属を演じたジョニー大倉は在日韓国入二世である。またジョニー大倉は『異邦人の河』（一九七五年李学仁監督）という、在日の映画人が在日を描いた先駆的作品に、本名の朴雲煥で出演している。

井筒和幸監督の『ガキ帝国』（一九八一年）は大阪の不良高校生の物語であるが、在日朝鮮人の高校生たちも登場する。彼らは朝鮮語で会話し、画面には日本語字幕が流れる。また、在日をメインに据えた『ガキ帝国あぐたれ戦争』は、諸般の理由によりオクラ入りしたままである。

在日の自画像とも言うべき映画に『潤の街』（一九八九年金佑宣監督）があり、満を持して、月はどっちに出ている（一九九三年崔洋一監督）の登場となる。皆さんご存知の通り、主人公は在日朝鮮人のタクシードライバーである。内容についてここで語るのには野暮なので、「未観の方は必観」と、だけ言っておこう。

そして、二十一世紀『GO』（二〇〇一年行定勲監督）『青（chong）』

（一九九九年李相日監督）と在日の特に若者の、何でもないような日常から問題意識を斬り抜けていく作品の公開が続く。これからも、まだまだ才能豊かな映画人が輩出されるであろう。いやすでに、それは美空ひばりの時代から脈々と、血は流れているのである。

洪昌明

参考文献

- 四方田犬彦『日本映画史100年』集英社
- 門間貴志『アジア映画にみる日本』社会評論社
- 李鳳宇編『月はどっちに出ている』をめぐる2.3の話』社会評論社
- ビ・タ・B・ハ・イ『帝国の銀幕』名古屋大学出版局
- 櫻本富雄『大東亜戦争と日本映画』青木書店
- 佐藤忠男他編『講座日本映画』全六巻岩波書店

かんたん！おいしい！ アンニョンKorean Kitchen

- 材料 -
- トック 300g
 - 牛ロース薄切り肉 50g
 - さつまあげ 3枚
 - 玉ねぎ 1/4個
 - にんじん 3a0g
 - 干しいたけ 2枚
 - コンソメスープ
(干しいたけの戻し汁でもOK) 1/2カップ
 - 煎りゴマ 少々

- 作り方 -

1. トックは熱湯に入れ2～3分ゆで、水気をよく切る。
2. 玉ねぎ、さつまあげは薄切りにします。にんじんは4～5cmの短冊切りにして下ゆでをします。万能ネギは5cmの長さに切り、干しいたけは水で戻し、軸を落として薄切りにします。
3. フライパンにごま油（大1）を熱して肉を炒め、たまねぎ、しいたけ、さつまあげ、トックを入れ炒め合わせ、Aとスープを加え煮立てます。
4. 下ゆでしたにんじん、万能ネギを加えます。
5. 器に盛ってごまをふり、いただきます。



- A
(よく混ぜ合わせておく)
- コチュジャン 大2
 - 粉とうがらし 大2
 - 砂糖 大1/2
 - しょうゆ 大1
 - にんにく(みじん切り) 約大1
 - すりごま 大1
 - ごま油 大1
 - こしょう 少々